～山形から世界を見てみよう～

国際理解実践フォーラム2022

実施報告書

開催日:2022年12月～2023年2月

場　　所:霞城セントラル研修室、オンライン

主　　催　：認定NPO法人 IVY
　　独立行政法人 国際協力機構東北センター(JICA東北)
企画・運営：国際協力分科会、国際理解教育分科会、異文化理解分科会、多文化共生分科会、
　　高校生分科会　各分科会メンバー
後　　援　：山形県、山形県教育委員会、山形市、山形市教育委員会、山形市国際交流協会
協　　力　：山形県国際交流協会

目次

●目次・・・2

●分科会

国際協力分科会

With&After コロナにおけるアフリカと国際協力～JICA 海外協力隊活動紹介～・・・・・・・・・・・・・・・・３

国際理解教育分科会

そもそも探究ってなに！？～世界・地域・自分をつなげ、広がる『探究』の可能性と、その『根っこ』～・・・・６

異文化理解分科会

いろんな文化を知ろう～ゲームで楽しく異文化理解～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

多文化共生分科会

やまがたの『暮らしやすさ』を考える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

高校生分科会

日本語を学ぶタイの高校生との交流企画～タイと日本の高校生が、日本語と英語で語り合う～・・・・・・・・・・２２

●関係者・協力者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６

国際協力分科会

With & After コロナにおけるアフリカと国際協力

－JICA 海外協力隊活動紹介－

●実施日時:2022 年 12 月4日（日） 15:00～16:30
●実施場所 AIRY 研修室、オンライン(Zoom) ハイブリッド開催
●担当:小林みずほ(特定非営利活動法人山形県青年海外協力協会 YOCA)
●事務局担当者: 村岡 智子(JICA 山形デスク)
●協力者： 土井沙織さん（鶴岡市出身・ボツワナ・障害児・者支援）
五十嵐貴昭さん（鶴岡市出身・ルワンダ・コミュニティ開発）
●分科会のねらい・目的： 今年度派遣された青年海外協力隊 OV による、コロナ期を経てのアフリカの様子と活動についての事例紹介を行う。現在の世界について知って頂き、協力隊活動について考えるきっかけを提供するのが目的。
●参加者人数： オンライン９人、会場７人(+ YOCA 6 人） 計２２人

１．分科会内容 （※内容をセクションごとに区切って記載する）

活動内容	詳細
開始・ 会長挨拶	・国際理解実践フォーラムの説明 ・分科会の説明
ボツワナからの活動発表	土井沙織さんより、ボツワナの生活と活動紹介 ・国の基礎情報、食文化、任地の風景、活動先での取り組みの様子など、写真を提示し参加者がイメージしやすい資料を作成頂き、任国と活動についてお話頂いた。
ルワンダからの活動発表	五十嵐貴昭さんより、ルワンダの生活と活動紹介 ・国の基礎情報、食文化、任地の風景、活動先での取り組みの様子など、写真を提示し参加者がイメージしやすい資料を作成頂き、任国と活動についてお話頂いた。
パネルトーク	イベント開催以前に、パネルトークの展開を想定した質問事項をいくつかピックアップし、スピーカーのお二人に回答頂くなどして準備を行った。 ・派遣国に来て、一番びっくりしたこと、日本と違うと思ったことはどんなことですか？ ・派遣国での、コロナの対策・状況・考え方 ・派遣国について知ってほしいこと ・これからの活動で、特に力を入れたいこと

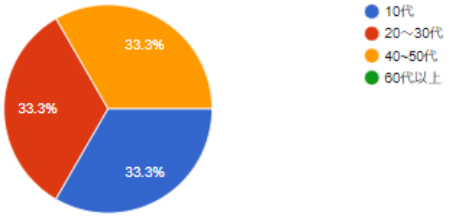
質疑応答	・派遣国で感じていること ・ルワンダ、ボツワナでのジェンダーの考え方について ・なぜ協力隊に参加したのか ・各国のジェンダーギャップは ・スピーカーのお二人の国際貢献への思いや今後のキャリアアップについて
ご案内	JICA デスクより（隊員募集、今後のフォーラムイベントのご案内）
閉会	参加者全員で写真撮影

2. 使用した教材や参考資料

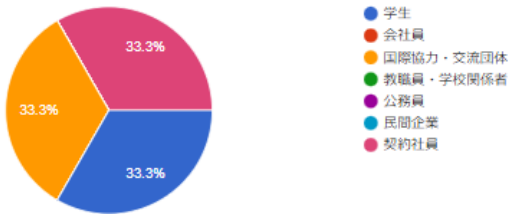
・パネルトーク用質問シート(五十嵐さん、土井さん)
・発表者パワーポイント(五十嵐さん、土井さん)
・OV 活動写真(展示用・デスク倉庫保有)
・協力隊関連書籍(展示、閲覧用・デスク本棚所有)

3. 参加者アンケート

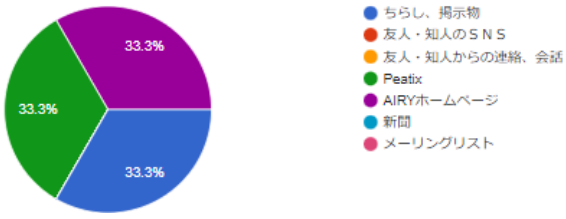
1，年齢
3 件の回答



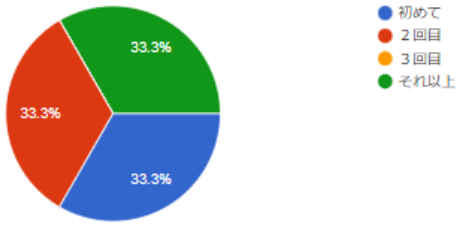
2，所属(団体、ご職業など)
3 件の回答

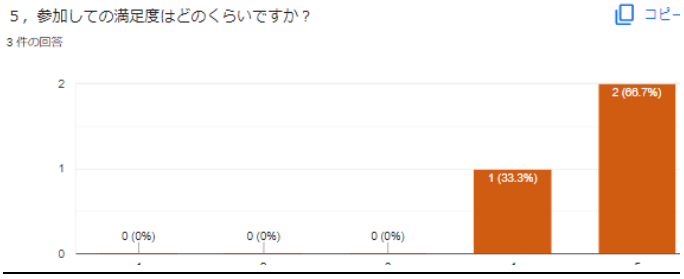


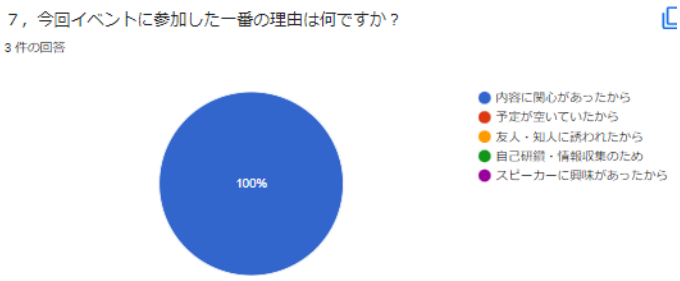
3，このイベントをどこで知りましたか？
3 件の回答



4，国際理解実践フォーラムへの参加は何回目ですか？
3 件の回答







6，質問 5 で選んだ回答の理由を教えてください

3 件の回答

今まさにアフリカにいる方からの発表というのはいいですね。
貴重な体験談をお聞きし、有意義な時間を過ごすことが出来ました！
実際に現地にいる方の貴重なお話を聞くことができたり、他の参加者の方とも交流することが出来たから。

4. 成果・結果について

昨年の課題だった高校生や大学生からの参加について、今年は会場にも3人の高校生が出席し、若い世代や協力隊 OV にご参加いただき、国際理解の推進と協力隊活動の広報につなげることができた。また、派遣中の隊員と山形にいる市民をつなげオンラインで話を聞くことで、遠いはずの海外やハードルが高いと思われる協力隊活動を身近に感じて頂くことができたフォーラムとなった。

5. 担当者所感

【小林みずほ(特定非営利活動法人山形県青年海外協力協会 YOCA)】

スピーカーの二人は、コロナ後待機隊員を除き初めての出発隊員で、各国の概要や協力隊活動に加えて、アフターコロナの各国の状況なども語って頂いた。

感染拡大が収まらなかったためオンラインも併用しハイブリッド型で行ったが、ボツワナは安定したネットワーク環境が整わない会脳性があることから、途中で接続中断する場合も考慮し、事前リハや録画なども準備した。結果的にオンラインでお話を全て聞くことができたが、不測の状況にも知恵を出し合うことで開催をあきらめるのではなく実施することができてよかった。

スピーカーのお二人は活動が始まりまだニか月程の状況の中で、すでに配属国や配属先について理解を深め、積極的に活動に取り組んでおり、その様子をお聞きすることで日本にいる私たちも協力隊パワーをおすそ分けして頂くことができた。

パネルトークと質疑応答の時間もきちんと確保できたことで、双方向のコミュニケーションが叶い、山形県民と現地の隊員、そしてルワンダとボツワナをつなぐことができた2時間となった。

国際理解教育・開発教育分科会

『そもそも探究ってなに！？』

～世界・地域・自分をつなげ、広がる『探究』の可能性と、その『根っこ』～

●実施日時：2022 年 12 月 11 日（日）　9：30～12：30
●実施場所　オンライン(Zoom)
●担当：槙正智(山形県青年海外協力協会)、山下将一(JICA 東北)、小笠原直子(認定 NPO 法人 IVY)、渡邊太(山形市立西小学校/FKG 米沢)
●事務局担当者：阿部眞理子(認定 NPO 法人 IVY)、村岡智子(JICA 山形デスク)
●協力者：鈴木 精（九里学園高等学校）、二戸部優（天童市立津山小学校）
●分科会のねらい・目的：探究学習で児童生徒が資質能力を伸ばすとどんな素敵なことが起きるのか？今求められている「探究」とはそもそもどのようなもので、なぜ必要だと言われているのかを考えるために、実践者の実践と思いを聞き、参加者がまずは自分なりの『探究像』と『理由』を持てるようなきっかけをつくる（『探究像』と『理由』持つことの大切さに気づくことができるようにする）。
●参加者人数：20 人

1.分科会内容（※内容をセクションごとに区切って記載する）

活動内容	詳細
開会行事 （５分）	開会の挨拶と分科会概要説明
アイスブレーク （５分）	チャットに以下の２点について書き込んでもらう ①「過去一番ハマったこと」 ②今日の分科会に期待すること
パネルトーク① （３０分）	○　パネリストの自己紹介 ○　九里学園高校の実践紹介

	・学校という枠を超え、地域社会に学びを求め、机上の学習では不可能な生きた学びを提供することで、生徒の多様な資質・能力を伸ばすことができる。 ・ グローカル・ラーニング（グローバル課題とローカル課題：知見の相互方向的応用）を３年間かけて練り上げていく。 ・ グローカルα：格差、貧困、食料問題、難民移民等地球的課題を NPO 法人や大学などと連携して、１～３学年までの縦割りで学習する。 ・ 「楽しい」から始まる学び（Passion Fun Creative 情熱を持って、楽しいことを、創造的に！を合言葉に） ・ 考察、対話、ワーク、発表のサイクルをつくることで、人前で発表することや自分の考えを述べることに慣れさせる。 ・ 模擬国連（国連弁当、2030 年の食料保障、気候変動）→生徒は情報収集、提案、交渉、最終決議というロールプレイを通して活動にのめり込み、当事者意識を持てるようになる。 ・ 脱炭素未来フォーラム、米沢市への政策提言：自己有用感に繋がる ・ グローバルな視点とローカルな視点を行ったり来たりする、時には一体化して取り組むことで、多様な視点を身につけていける。 ・ 食と健康プロジェクト（高畠町の有機農家、町役場と連携）：フィールドワークにより自分自身で価値と課題を見つける（毎回の振り返りも大切にする） ・ 多文化共生プロジェクト（国際交流協会と協働でワークショップや座談会を行う） ・ 調査や実験など多様な探求学習の活動（大学教授からの助言や町民との対話・ワークショップなど） ・ 2 年生でマイプロジェクト（個人で取り組む課題研究）に取り組み、コンテストへも参加 ・ 主体的協同的な探求活動（南陽市での外国人への災害対策ワークショップ、セゾンファクトリーでの商品開発、有機農業の聖人：星寛治さんへのインタビュー、国際交流協会・市役所とゴミ分別動画作成、錦屋と紅花を使った商品開発と道の駅での販売など） ・ 積極的に発表する機会を大切にする（校内だけでなく様々な大人に聞いてもらう機会もつくる） ・ グローバルタレント塾（国際的に活躍する人から生き方を学び、国際協力とはどんなことなのかについても考える）：生徒の学びの下支えとなる。 ・ 成果：非認知能力の大きな向上 情熱を持って自分の探究学習について語る姿。自発的な行動の誘発、地域課題への関心と地域貢献への意欲と自信の向上から自己有用感が育まれる。生徒は能力の向上を実感し、学びの器が大きくなる。 どう生きていきたいか（自分の生き方）⇒社会貢献×研究で学んできたことが大学選びにもつながってくる。
グループトーク①（１５分）	九里学園高校の実践を聞いて感想交流 ①「すごい」「面白い」と思ったこと ②自分もやってみたいと思ったこと

	③聞いてみたいこと ・　質問：探究学習の注意点やデメリットは？ ・　質問：世界や地域のきれいごとばかりではない問題点（利害関係など）を生徒にどこまで伝えるか？ ・　質問：生徒の非認知能力を高めるにつながる、教室の環境づくりはどうしたか？ ・　質問：週３時間だけでここまでの成長ができるのか？授業以外での取り組みはあったか？ ・　質問：外部との連携はどうやっているか？ ・　質問：教師がどのようなサポートをしているのか？
休憩（５分）	
パネルトーク② （３０分）	○　二戸部先生が聞いてみたいことを質問して、精先生に答えてもらう ①「探究学習に取り組もうと思ったきっかけは？」 ⇒協力隊でザンビアの子どもたちと関わる中で、自分の世界の見方ってあっているのかという疑問を持ち、帰国後に生徒と学ぶ中で、自分の課題意識と探究学習的な学び方との相性の良さを感じた。世界のダークな面の伝え方は、自分が知っていることは限られているから、知っていることしか教えられないし、調べたことを伝えることしかできない。その中で、自分の中の偏向性（思い込み、勝手なイメージ）に気づく。生徒たちも「教養は偏見を生まない」といって勉強をするようになった。 ②「これまで扱った題材は？」 ⇒「カカオ農園と児童労働」「ファストファッションと技能実習生」：私たちの生活と世界的な問題の所在について。「難民問題」「貧困問題」：厳しい現実について。 ③「難民といったときに小学生のイメージは『可哀想な人たち』『貧しい人たち』といった程度になってしまうが、そういったイメージを学ぶことで更新していくということでしょうか？」 ⇒難民問題も可哀想だけでは済まされない、人道主義的なことで助けようとしてもそうはならない問題について、「じゃあ、なんでそうなっているのかな？」というところを難民の疑似体験をしたり、そうならないための構造を生徒と一緒に考えたり調べたりする中で「じゃあ、どうする？」ということを外部の人材も交えながら考えていくようなことを意識的に仕掛けている。 ④「難民問題など当事者意識を持つことが難しい問題において、どうやって当事者意識を持たせていくのか？」 ⇒どうすれば当事者意識を持たせられるかというのは、これという答えはまだ私たちも見いだせていない。ただ、九里でやっていることは料理に例えると、フランス料理のフルコースというよりも、多国籍料理というイメージで、いろいろやっていく中で、生徒が「自分はこれが気になる」という視点（フック）を持てればいいと思っている。生徒一人一人の成熟度も違うので、諦めずに投げかけ続けることで、何かのきっかけで、何かが変わるかもしれないとは思ってやっている。「なんでこんなことをしなくちゃいけないの？」と言っていた生徒が活動や教師の寄り添いを続けていく中で、ちょっとしたきっかけで探究学習にのめり込み、後輩に「この探究学習は生きる上で一番大事だから、しっかりやらなきゃダメよ！」と言うようになるということもあった。生徒たちの反応

	を見ながら教師も迷いながらやっているし、失敗もあるが、その都度教員同士で考えを交流しながら修正してやっている。だから、生徒たちの表情はよく見ていて、必要な資料や論文などを提供したりもする。１ヶ月に２回くらい１～３年合同のゼミもしていて、学年が上がるについてれ自分たちの役割（リーダー、ファシリテーター）も意識して、学びを深められるようになっていく。生徒同士の対話の中で育っていくものも大きい。 ⑤「模擬国連という場が国と国の対決ではなく対話の場として機能している？」 ⇒教師もこんなことをやったら面白いだろうというのでやっているところもある。実際の国連でも二国間の対立だけでない第３国が関わって力を発揮するというのもあるのが大切だし、ディベートでもＡ対Ｂの勝ち負けではなく、テーゼとアンチテーゼだけでなくシンテーゼが生まれることが大切だから、そこをクリエイトしていくことが今を生きていく力を身につけることにつながっていくと思っている。 ⑥「国際理解教育・開発教育の素材が力強さや魅力、それを総合で扱うダイナミズムとは？」 ⇒問題はそれを問題と認識して初めて問題になる。問題と思わない限り問題にはならない。そいう仕掛けが一番しやすいのが国際理解や開発教育。「どうすればいいの？」ということに向き合っていくストレス耐性を育ことや自分の偏向性に気づき学んでいくことにもつながる。様々な人との出会いの機会も生まれて、学びを深めることができることも大きい。様々な学びが有機的につながっていくことで、自然と生徒たちの中に教科横断的な学びが生まれるし、生徒たちが主体的に考え学び、行動するようになっていく。
グループトーク②（２０分）	話題１「二人の話を聞いて考えたそもそもの『探究』とは？」 話題２「二人の話を聞いて考えた『なぜ探究は必要か？』」 話題３「自分が学校で『探究』を創り出すために『今の自分に足りないもの』（身に付けたいこと）は？」 話題４「学校や教員に探究をする上で期待することは？」 ＜全体交流で出された話題＞ グループ１ ・探究で知ったり考えたりすることは楽しいけど、ときには苦しいこともある。それでも探究がなぜ必要かといえば、豊かな人生を送るため。よりよく生きるため。では、「豊かな人生」や「よりよく生きる」ってどんなことか？ということについて意見交流することで、様々な視点を持つことができた。その中で出てきた印象に残っているのがが「つながり」で、探究をすることで色々な人とつながり、知識が繋がっていく、そういった「つながり」から豊かさが生まれてくる。 グループ２ ・学校で探究を創り出すために、小学校と中学校で共通することは、教員が学び合える関係になること、学び合える時間をつくっていくことではないか。その中で、子どもたちにどんな力を身につけさせていきたいかを見極め、子どもたちがどういう力を身につけたいかを知り、教師が子どもたちにたちに伴走していく形で、教師も探究をしていくことが大切。 グループ４ ・実践の話を聞いて、探究の意味は、「結果」「成果」よりも、「生徒たちが自分自身で何を発

	見したか」や「何に感動したか」というプロセスを大切にしていると感じた。 グループ５ ・授業の進め方について、教員として与えるのではなく問いかけていく、対話していくことが重要ではないか。学校内だけでは限界がある。社会に出てから生き延びるための対話、術を要請することが重要。一生学び、一生探究。
質疑・応答（１０分）	質問は、 ①グループトークの時にチャットに書き込んでもらう ②挙手で質問してもらう 槙さんに拾ってもらって、精先生や二戸部先生に振ってもらう 質問①生徒のそれぞれの意見が違うとき、生徒個々のモチベーションが違うとき、教員はそれをどのようにファシリテートしているのか。 ⇒模擬国連で生徒が衝突することはしょっちゅうあるが、教員はそれをポジティブに捉えて見守っている。そこで教員が入ると予定調和になる。生徒たちは賢くて、対立が起きると第三者が入って調整したり、議長が調整に入ったりする。その中で調整能力がついていく。模擬国連の世界大会に参加された方の話では、日本人がいないグループは全部議案がまとまらなかった。日本人がいたところはうまく調整して合意形成ができた。これはニュータイプジャパニーズで、日本人は調整する能力に長けているよねということだった。モチベーションに関しては、模擬国連だと大きなうねりが生まれる中で、黙っていてもそこに入らざるを得ない環境になる。「あなたの国はどうなの？」というふうに問われるので、傍観者的に引いて見ているというわけにはいかなくなる面はある。その中で、できていない生徒には組んでいる３年生が引っ張る。１年生も頑張らないと自分が３年の時にこうはなれないということがわかってモチベーショにつながっていく。個人的な探究学習では、周りが進んでいる状況で、自分ができていないと焦るという生徒は出てくるが、そういう生徒には教師が声がけをするようにしている。そこで大切にしているのは「楽しいから始まる学び」で「これ、楽しんでいる？」ということを問いかける。自分の思いや興味と向き合えるように、自分史を書き出させるなどすることもあり、必要に応じて探究テーマを変えることもある。 質問②授業をストライキまでして街へ出て、JICA など海外事業を批判する１０代の若者たちが増えてきている。彼らの主張を聞くと気候変動や国際協力をよく調べ、学習していて、自分なりによく考えた結果、彼らなりのビジョンがあることがよくわかります。このことについてどう思いますか。 ⇒これについては、「ちがいのちがい」などを使って教材にすることがある。授業に出ないでデモをしている子たちがいる一方で、日本の生徒は教室で座って授業を受けている、これはいいのか？ということを生徒と考える。批判は批判でいいが、その批判の裏付けはどうなっているのか、どういう観点で批判しているのかということについて話をする。個々の考え方があるので、それ自体を否定することはできないといことはまずあるが、どこまで考えて、どこまで調べて、どこまで話し合っているのかということが重要。そういった批判をしている生徒たちは、ネットで情報を得ていることが多いと考えられるが、そうなるとビッグデータに集約されて、自分いとって都合のよい情報しか出てこなくなるから、それで調べた気になっていないかということを話すようにしている。彼らがビジョンを持っているとすれば、そういった考えもあるよねと受け入れた上で、「じゃあ、次の『問い』はいったいどこに出て

	くるのかな」ということは大事にさせたい。批判の先にある、「じゃあどうすればいいのか」という次のビジョンを問うことを大事にしたい。
まとめ（５分）	精先生と二戸部先生から最後に一言 二戸部先生：探究とは、人との出会い、素材との出会いに尽きる。そういう捉え方が大事。その上で、探究とは何かについては深く考えることが必要。探究は一生続く学び、という話題も出たが、小学校の探究も最初のその第何歩目かになる。実践の中で紹介されていた生徒のことを考えても、学校という時間にとらわれず、自分に火がついたところから、高校３年間、大学４年間という過程で区切られるものではなく、ずっと学びが続いていく、その瞬間に立ち会い、必要なテーマをポンと投げかけるような、そんな手伝いをしているのが教師ではないか。 精先生：今日の機会で改めてこうやって話すことの大切さ、これも一つの対話。また、自分自身との対話でもあり、自分自身への気づきもあった。教員の本質は願うこと。そのために何ができるか。自分にとってはたまたまそれが「探究」だった。「強くしなやかな人に育ってほしい」「人を前向きなエネルギーにしていく人に育ってほしい」そういったことをやるには、探究で挫折しながらも粘り強くやっていくことが一つ大事なことではないかということを思っている。九里の生徒たちは、ほとんどの生徒が、「探究学習をやってこういうところに課題を見つけた」といって、自分がこれからやりたいこと（この大学のこの先生のもとで学びたい）を見つけて、AO 入試（総合型選抜）で大学に進学していく子が多い。これは一つ生き方の軸を作れているという意味ではいいことだと思う。
閉会行事（５分）	閉会の挨拶と諸連絡（①アンケートへの協力のお願い　②感想交流会について） ・「探究の学びは自分の生き方を模索する営み」であって、探究を通してそのメンバーの最適解をいかに見つけていく、その中でぶつかったり悔しい思いをしたりして、より良い自分の「納得解」を見つけていくという営みでもある。教員からすると、子どもをしっかり見取り、手を差し伸べる、それによって子どもたちが学びを深めていけるということを、精先生の話から改めて気づくことができた。一番大事なことは、教師が探究をしていること。これに尽きる。それが子どもにとってのモデルロールになる。教師であったり、関わった外部の人だったりが子どもたちの「こういう人になりたいな」のモデルになり、子どもたちが自分をステップアップさせていく、ということにも気づくことができた。「探究」という言葉はあるが、その概念や価値、そういったなかなか見えないところが少し見えるようになってきた、解像度が高くなってきたかな、という時間を過ごすことができた。

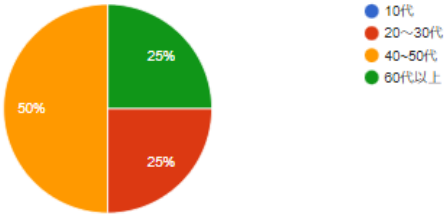
2．使用した教材や参考資料

プレゼン用パワーポイント

3．参加者アンケート

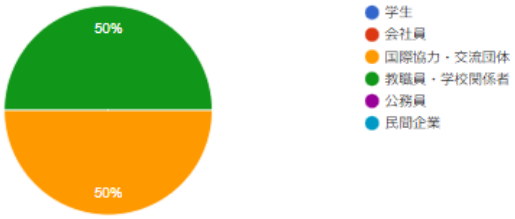
1，年齢

4 件の回答



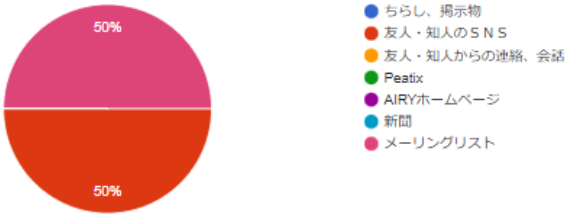
2，所属(団体、ご職業など)

4 件の回答



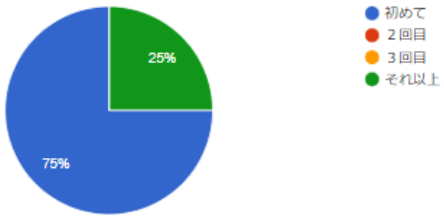
3，このイベントをどこで知りましたか？

4 件の回答



4，国際理解実践フォーラムへの参加は何回目ですか？

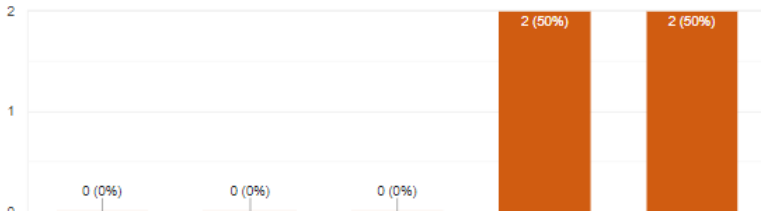
4 件の回答



5，参加しての満足度はどのくらいですか？

件の回答

コピー



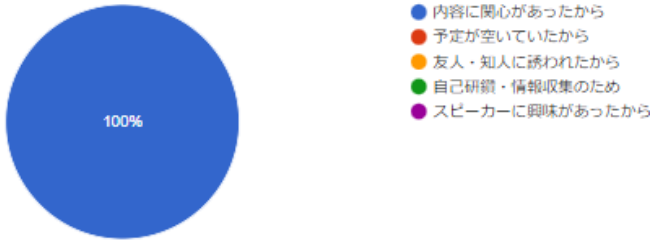
6，質問５で選んだ回答の理由を教えてください

4 件の回答

- 探求の意義や、教員の熱意がよく分かったから
- 素晴らしい実践をお聞きできたから。
- OBの実践が聞けたから
- いろんな実践事例を知ることができました。

7，今回イベントに参加した一番の理由は何ですか？

4 件の回答



8、感想・学び・ご要望など

4 件の回答

ありがとうございました!

オンラインで参加できて有難かったです。意図もおありだと思いますが、もう少し早く参加者の質問を取り上げることや、全体の時間をもう少し短めに設定してくださると更にありがたいです。この度はセミナー開いてくださり、ありがとうございました。

協力隊OBで帰国後、40年近く開発教育をやっています。貴会で話す機会があれば幸いです。

探究をおもしろいと思ったり、どうしようかと思案したりしている人とつながることができて、元気が出てきました。教科の授業では見られない生徒の成長の姿を見ることができるという確かな思いを持つことができた気がします。

４．成果・結果について

・アンケートの回答数が４件と少なってしまい、参加者が参加後にどのようなことを感じたのかを確かめることはできないが、今回の分科会では、鈴木精先生の九里学園高校での実践を通して、「どんな探究をしているのか」「どうすれば探究学習になるのか」というところから、参加者がそれぞれの視点を持ち寄り、それを伝え合うことで、「探究とは？」について深めることができていたことが、参加者の発言や質問などからも感じることができた。「探究とは何か？」という問いに絶対解はないので、今回の分科会でも何か答えを出すということよりも、参加者が話し合い、思いを共有する時間とそこから何を持ち帰ってもらえるかに価値があり、そこを成果として評価することは難しいが、この時間が参加者の今後の「探究」を促す一助になればと願う。

５．担当者所感

【渡邊 太(山形市立西小学校/FKG 米沢)】

「探究」というテーマに関しては、それ自体の話や説明を聞いただけで、理解したり、できるようになったりするものではなく、教師自身が探究をしてく中で、その必要感を感じ、試行錯誤を繰り返していく中でしか、「探究とは何なのか？」の納得解を得ることはできない。「教師が探究をしなければ・・・」というのは道理だが、現実を考えれば、教師は日々の教科指導と生徒指導などに追われて職務以外で探究をする余裕がない。しかし、それでは教員が学校で今、社会に求められているような、あるいは今後子どもたちに必要となるような「探究」を生み出すことは難しいのではないかと考える。今回の鈴木精先生の九里学園での実践は、生徒の姿からもその素晴らしさが十分に伝わってくるが、結局ところ実践の魅力は、その実践以前に、精先生がどんなビジョンを持ち、そのビジョンを持つのにどんな過程をたどったのかというプロセスと、実践を通して精先生自身がどのように変容したのか、現在進行形で変容しているのかということに支えられている。今回の分科会では、地域と世界をつないでより良い世界のビジョンを持ち、自分位できることにチャレンジし続けることで、自分を更新し続ける精先生の人間としての魅力がきっと伝わったと思う。参加者にとって、それが「自分は探究しているのか？」と自分に問うきっかけとなって欲しいし、「探究を通して自分が伝えたいこと、子どもたちに見つけて欲しいことは何なのか？」ということを社会の現状や地域、日本、世界に目を向けて考えてみるきっかけとなればと思う。そして、「誰よりも探究を楽しむ教師」が増えていけば、そこから学校の「探究」は、広がりと深まりを持って、さらに豊かな学びにつながっていくことを期待したい。

課題としては、今年度の分科会も教員の参加者が伸び悩んだ。教員ではない参加者からの意見も、教員にとっては新たな視点となるので、今回もそういう意味では、全体を通しては面白い分科会にはなったと思う。しかし、教員の参加者が伸びないということは、「そもそも探究とは？」という「探究」の本質を探るようなテーマは、多くの教員にとってはニーズがないということだろう。シンプルにニーズということを考えれば、実践紹介であろうし、ワークショップ体験などの方が楽しそうで興味を持ちやすいのかもしれない。今後の方向性としては、そういった、よりシンプルに楽しめることをテーマにしていくということも考えていった方がいいのかもしれない。

これまで同様、今年度も分科会の運営メンバーが各々の持ち味を生かしながら、準備を進めていくことで楽しく分科会をつくることができました。関係各位の皆様、ありがとうございました。

異文化理解分科会

いろんな文化を知ろう！

～ゲームで楽しく異文化理解～

●実施日時：2023 年 2 月 12 日（日） 14:00～16:00
●実施場所：山形県国際交流センター 研修室
●担当：キム・ギョンハ（山形県国際交流員/韓国出身）、ライト・シアン（山形県国際交流員/アメリカ出身）、スピード・ジェシカ（山形県国際交流員/イギリス出身）
●事務局担当者： 村岡智子（JICA 山形デスク）
●分科会のねらい・目的： 山形県民と県在住外国人との多文化共生へ繋がる興味関心の入り口として、山形県 CIR の出身国に関する話を聞くことで、違いを知る・理解する・共感する、を体験し参加者同士で視野を広げ、学びを深める機会とする。
●参加者人数： 18 名（申込者 21 名）

1．分科会内容 （※内容をセクションごとに区切って記載する）

活動内容	詳細
開始・挨拶	・イベントの趣旨説明　　・イベント担当者による自己紹介
グループワーク①	『韓国、アメリカ、イギリスのイメージってどんな感じ？』 ⇒各テーブル内メンバーで話し合い紙に書き、発表してもらう（グループ内のアイスブレーキング、自己紹介を兼ねる）。 ・一般的なイメージ情報の表出が多くみられ、概ねどのグループも似たような内容であった。
クイズ ※途中休憩あり	 ・様々なジャンルのクイズを用意（文化慣習、食生活、社会、学校、ルール、恋愛など） ・具体的な情報を示したのち（例：●●が○○で△△）、「これは３カ国の内どの国でしょうか」と参加者に尋ねる形式。 ・参加者はグループでディスカッションし解答を一つ決める（ホワイトボードに書き込む）。 ・答え合わせの後、参加者の質問に答えたり補足情報などを入れ、日本や他国との違い、

	なぜそうなったのかなど成り立ちや云われ、社会背景などについて具体的に伝えた。
グループワーク②	『３カ国の国のイメージはどう変わった？』 ⇒個人で考えたのちグループ内で共有し、全体でもグループ内の感想を共有 ・クイズやそれに伴う補足説明を受けて特にイギリスの国のイメージに変化が出る参加者が多くみられた。 ・日本とは特に異なる部分への印象が参加者の中に強く残った印象。
質疑応答	・全体を通して参加者が感じた疑問や質問に答えた。 ・クイズで出されたトピックに対しての質問のほか、海外で暮らすときの心得など、参加者からは多様な質問が寄せられた。
閉会	・アンケート記入と記念写真撮影

2. 使用した教材や参考資料

・企画担当者3名作成のパワーポイント

3. 参加者アンケート

質問項目	回答									
①この講座をどのようにして知ったか	掲示・ポスター	3	AIRYのwebサイト	6	FB・instagram	1	その他	4 (内３件が知人からの紹介)		
②"文化"の内容についてい	すごく分かりやすかった	12	分かりやすかった	2	分かりにくかった	0	すごく分かりにくかった	0		
③講座全体の内容について	すごく分かりやすかった	12	分かりやすかった	2	分かりにくかった	0	すごく分かりにくかった	0		
④この講座は知人にお勧めするか	お勧めします	13	お勧めしない	0	どちらとも言えない	1				
⑤満足度	とても満足	12	満足	2	普通	0	不満	0	その他	0

参加者から頂いたコメント

・生活、教育、食生活など私たちが気になっているテーマばかりでとても楽しく学べました。
・皆さんすごくフレンドリーで、意外な文化をたくさん知ることができて楽しかったです！アドバイスももらえてすごくいい経験をさせてもらいました！ポスターは学校にありました。
・自分では知ることのなかった違う国の生活や食文化について理解を深めることができた。
・いろいろな文化が知れて楽しかったです。また企画があればぜひ参加したいです。
・他の国の文化について楽しく知ることができました。初めて知ることが多く楽しく学べた。
・イギリス、韓国、アメリカの知っているようで知らない事柄がとてもよく分かりました。
・とても楽しく文化を知ることができ、２時間がとても短く感じた。
・３カ国それぞれの違いを一緒に理解できました。イギリスの今までのイメージが変わりました(意外とジャンクフード的なもの多かった。カレーが国民食になっているのがびっくりした)。

4. 成果・結果について

【満足度】初対面の方々同士のグループワークであったが、イベント冒頭で「お互いの意見を大切にし、否定しないようにしましょう」という全体ルールが提示され、コミュニケーションスタンスの共通認識が全体に与えられたことにより終始穏やかに全体が進んでいった。受信するだけでなく交流しながら知る機会とできたことは参加者の方々も対面形式イベントの醍醐味を大いに味わうことができた。
【構成】3名でイベント実施する際にはそれぞれ持ち時間を決めて行っていたが、今回は全体を3名一緒に回すというやり方を初めて試みた。結果、準備したクイズの一部が実施できないという流れになったが、「ほかにも興味深いお話がいっぱいある、もっと知りたい方は4月からの私たちのイベントにぜひご参加を！」と今後のイベント参加へ誘致するという前向きな形で状況を活用できた。

5. 担当者所感

【ファシリテーター：スピード・ジェシカ（山形県国際交流員）**】**
３人の CIR が AIRY で行ったイベントの中で、 最も成功したイベントの一つだと思います。参加者の皆さんは本当に興味を持ってくれたようで、積極的に質問をしてくれました。また、プレゼンの内容がとてもシンプルだったので、冗談を言いながら発表できて楽しかったです。それから、参加者からたくさんの良いフィードバックを受けました。改善点として、今回のイベントではタイムマネジメントが問題だったと思います。スライドをもっと少なくすべきでした。また、プレゼンテーション中にこのことに気づいたのですが、CIR 同士の調整が上手く行かなかったので、次回はもっとコミュニケーションを取りながら進行していきたいと思います。
【ファシリテーター：キム・ギョンハ(山形県国際交流員)、ライト・シアン(山形県国際交流員)】
・新しいプレゼン方法を行うにあたって実施の準備・練習(時間配分、グループ分けなど)をもっとするべきだった。
・新しいやり方にトライできたこと、参加者一人一人が発言できる状況が作れたのが良かった(少人数グループならではの良さ)。
・参加者の中に入っていきながらやり取りするか距離を取った状態で関わるか、全体の様子を見ながら適宜判断しながら関わることができた。

多文化共生分科会

やまがたの『暮らしやすさ』を考える

●実施日時：2023 年 2 月 18 日（土） 14:00～16:00
●実施場所：オンライン(Zoom)
●担当：澤恩嬉(東北文教大学 准教授)、西上紀江子(認定 NPO 法人 IVY)、リチャード・チン(川西町国際交流協会)、粟野さとみ(山形県国際交流協会)
●事務局担当者：阿部眞理子(認定 NPO 法人 IVY) 、村岡智子(JICA 山形デスク)
●協力者：
〈ファシリテーター〉笹原智子、門脇エニータ
〈パネリスト〉顧洋（こよう・中国出身）、郭琬筑（かくわんずー・台湾出身）、アルビ バタラ ピナユンガン（インドネシア出身）、ゴー ヴァン ニー エム（ベトナム出身）
●分科会のねらい・目的： これまでは、県内に中長期的にわたって滞在する外国出身者との共生を考えてきた。今回は、近年クローズアップされつつある仕事や学業で山形に滞在している若者が山形での暮らしについて感じていることを糸口に、やまがたがさらに暮らしやすい街になっていくためにはどのような工夫が求められているのかについて考える。
●参加者人数： 14 名(お申込み16名)
※パネリスト・協力者を含めると20名規模

1. 分科会内容 （※内容をセクションごとに区切って記載する）

活動内容	詳細
開始・挨拶と開催説明	多文化共生分科会のねらい、本日のながれ、事務連絡 (司会：澤、 Zoom 管理：粟野)
インタビュー	パネリスト（外国人出身者）へのインタビュー/質問(ファシリ：西上) ① 自己紹介(3分×4人 12分) ・山形に住むきっかけ ・山形在住歴 ・困った時とその時こういうのがあったらいい、あったらよかったについて ・期待していたこと/なかったこと など ② インタビュー(10分) ③ 参加者からの質問(10分)
グループワーク	外国人出身者と一緒に“やまがたの暮らしやすさについて考える” ・1グループ6名程度(参加者4人+パネリスト1人+グループファシリ1人) ・開催前にどのパネリストの話を聞きたいかアンケートを取り、希望に沿ったグループへの参加者配置
全体共有	各グループ内でどんなことが話し合われたかを全体にて共有 ・簡易的にまとめて各グループ代表の方にお話頂いた

感想	参加者の方々から感想を発表頂く ※コメントは主に下記のアンケートを参照
お知らせ・本編締め	予定では、ここで終了 　もっと話したいと希望する人が自由に話せる時間としてフリートークタイムが30分あることの告知
フリートーク	希望者のみ残り、今回の企画内容に触れながら自由にトーク(30分程度)

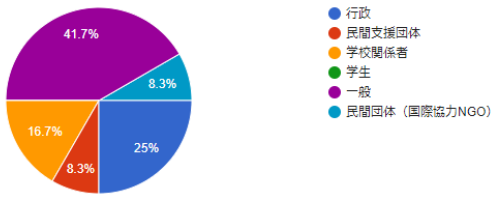
2. 使用した教材や参考資料

・パネリストへの事前インタビュー情報(運営用内部資料)

3. 参加者アンケート

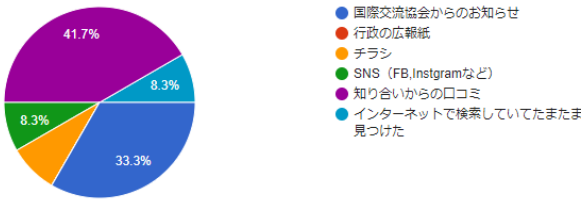
属性

12 件の回答



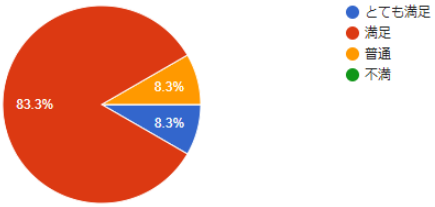
この分科会を何で知りましたか

12 件の回答



分科会の内容はいかがでしたか？

12 件の回答



今後、どのようなテーマの分科会に参加してみたいですか？

8 件の回答

対面での分科会（そろそろできそうですね）。多文化共生の枠組みが継続してあるということで、山形県での多文化共生の課題を長期的スパンで掘り下げることができてまたよいのだと感じました。

このまま同じテーマを重ねていただくと、活動として詰めていけて良いと感じます。他にはダブルマイノリティのお話があれば、ぜひ参加したいです。

１）県・市・各地の観光課・商工会議所・NPO・教育機関・マスコミなど県内の資源（ヒトモノカネ）をつなぐためのネットワークづくり。
２）色々な小さなアイデアを実現するための知恵を集める分科会。（JRと交渉して駅に公的イベントの案内板を無料で出す。インスタ向けの外国語の短い観光案内動画を作成する。姉妹都市を活用する。小野川温泉のような発想の柔軟な観光地とつながる。イスラム教に対する正しい知識を伝える。東南アジアのムスリム向けの観光政策を本格化する。市内の大学生や高校生に居心地の良いカフェや食堂を作る。家庭用花火のできる場所を用意する。大雪が降ったら、雪だるま作りコンテスト。ホタルや星空のアピール。等々）

やさしい日本語の勉強会

外国の方と本音で語れるような場面があれば参加していきたいです。

わかりません。

多文化共生の取り組みをもっと知りたい（技能実習生とのつながり方とか）

参加者から頂いたコメント

縦割りでない緩やかなソフト面でのプラットホームがもっと広がっていくといいなと思いました。

　プレゼンターの4人の皆様のお話すべてが大変参考になりました。またモデレーターの澤先生、西澤さんのお話の引き出し方、話の受け止め方がとても心地よく、終始興味深く拝聴いたしました。他の参加者の皆様、特に県外(いわゆる「外」)から山形に来た方の話もとても参考になり、私自身少し前から「国籍問わず、県外からやって来た人の居場所」ということを考えていたので、それを実際に聞ける大変貴重な機会だったと感じます。
　閉会後のお話もとても楽しくて、今ままで参加したどのミーティングよりも楽しい時間でした。
　欠点としては、参考になり、楽しすぎたので、時間が短すぎると感じてしました。今後も定期的に開催して、というお話がありましたが、運営のご負担でなければやはり何度かかけて皆様のお話をじっくりお聞きしたいというのが正直な感想です。もしくはやはり交流できる場、または何か皆さんで一度つながって、好きな時間に談話できるような(Discodeのような？昔のmixiのコミュニティような？Facebookのグループとか？)手段があればいいなと感じました。

　テーマに関することで言えば、様々なタイプの人のニーズに合わせた、様々な居場所があれば良いのでは思いました。郭さんがおっしゃっていたのですが、一言に「外国から来た住民」と言っても、例えば「ヴィーガン」や「LGBT」、「メンタルヘルス」といった、それぞれ個々のバックグラウンドがあります。そしてその括りの場合は国籍を超え、共通の興味を介した人々が自然と落ち着ける「心地のよい」場が提供できる、ということに大変共感しました。
またアルビさんのような「家にいながら交流したい」、また対面で交流したい、というような手段的なニーズにも答えられたら良いなと感じます。(私も出不精なので、Zoomはとてもありがたいです)
こう考えると、外国住民の方への支援の延長(?)で、地元住民(特にマイノリティ)のためにもなる居場所が提供できるので、双方の利益になるはずですから、やらない手はないと思います。
　居場所の「広報」という問題も確かにとても重要で、口コミかネットかという話がありましたが、個人的には他の参加者の方がおっしゃっていた「ポータル」のような形、もしくは年代によって使う媒体が違うので、口コミ・ネット双方を駆使する必要があると感じます。(大変労力がかかるというのが難点ですが…)

　今回参加させていただき、自分にとって特に収穫となったのは、自分が思っていること・したいこと思っていることを同じく考えている方がいると知れたことです。加えて、自分になかった視点からの意見をお聞きできたことでした。
　プレゼンターの皆様、運営に携わってくださった方々に心よりお礼申し上げます。貴重な機会を提供してくださり、誠にありがとうございました。

外国人の方が、日本に来てからは職場の友人しかいないと回答され、職場以外で人と繋がる場が必要と感じたこと

多文化共生に関する話し合いが、「日本人」と「外国人」という、いわゆる出生の違いを意識させられながら進んでいったが、果たしてそれが主催者の意図するものであったのか、疑問が残った。各々の立場や考えの表明に関しては、「他者の批判」を回避し過ぎたあまり、ぼんやりしたステレオタイプの空気を読んだ内容に終始した感もあった。

外国の方のいろいろな山形への印象を知ることができました。概して山形への印象がとても良いことがわかりましたが方言や移動手段など不便と感じていることみ分かり。我々としてどう支援していったらいいのか考えるよい機会になりましたm(_ _)m

気軽く参加しましたが実生活と密接な話がたくさん出て役に立つと思う。

山形の課題と良いところについて多くの意見を聞くことができたことです。県外から移ってきたら不便なことが多いだろうなと思っていましたが、逆に都会すぎず合っている、まわりの人が親切、などのポジティブな印象も出ており自分の山形を見る目も変わったかなと思います。

4. 成果・結果について

県内在住外国人４名をスピーカーとして招き、スピーカーの意見や体験談を参考にしながら、山形での“くらしやすさ”を考えるにあたって、プラス面だけでなくマイナス面にも焦点をあて参加者と一緒に考えながら話し合われた。主にプラス面のトピックが多く話され、マイナス面についても話して行こうとなるころにはグループトークの時間が足りなくなるなどの状況になった。マイナス面の事項についての深掘りできるに至らなかったが、各グループで話し合いが行われる中で、それらを認識するような情報に触れることはできた。終始和やかな雰囲気で活発に、かつ思いやりを忘れない発言で交流が行われた。分科会後のフリートークでは希望参加者らの間で「また集まって話をしよう」という展開になり、後日オンラインを用いてお話カフェの開催がすでに実現した。次回は対面できる状況も作ろうという話もあがっており、参加者の方々の参加目的や課題意識を整えながら、一緒に考え歩んでいけるコミュニティとして発展が期待される。

5. 担当者所感

【パネリスト：郭琬筑（かくわんずー）**】**

はじめて参加しました。“これからどうするか”を考えなければなりません。だから何かしたくて話をしました。山形は、ほかの都会より資源が少ない感じがしましたが今回のフォーラムに参加したのきっかけでいろんな繋がりをしりました。まだ力が小さい私に「小さいことからはじめたらいいよ」と言ってもらえました。しばらく山形にいるつもりだから何かしたい、私も「自分の居場所をみつけたい」と思っています。この機会にいろんな人と話をし、すごく勉強になりました。もっと深く未来もみんなと一緒に頑張り、つながりを大切にしたいと思っています。ありがとうございました。また機会があれば、対面でみんなと一緒に話をしたいです。

郭さんの言葉には“状況を変えていきたい”、“自分たちが経験したようなつらい体験をする人が減って欲しい、支えになりたい”という思いが強く感じられます。微力ながら、そういった思い持つパネリストの方々が発信できる機会に今回の分科会がなったのではないでしょうか。今後はこれらの情報を“知った”で終わらず、何かのアクションとして在住外国人の方々と県民の方々が協同し、自分たちのペースで『多文化共生』『やまがたでの暮らしやすさ』という部分へ繋がっていってほしいと思います。（事務局）

高校生分科会

日本語を学ぶタイの高校生との交流企画

～タイと日本の高校生が、日本語と英語で語り合う～

●実施日時：2023 年 2 月 25 日（土） 15:00～17:00
●実施場所：山形県国際交流センター 研修室
●担当：加藤翔真(山形県庁)、阿部眞理子(認定 NPO 法人 IVY)、村岡智子(JICA 山形デスク)
●事務局担当者： 阿部眞理子(認定 NPO 法人 IVY)、村岡智子(JICA 山形デスク)
●協力者：間宮利奈(東桜学館高校 教員)、ウィラワン ジャンタリマ〈＝フォン先生〉 (スワンナプームピッタヤパイサーン高校)、西上紀江子(認定 NPO 法人 IVY) ※いずれもグループワークのファシリテーターとして
●分科会のねらい・目的： パイロット企画。まずは試験的(ニーズを探る)に行うために取り組みやすい構成の交流会とする。日本語を学んでいるタイの高校生と、日本の高校生が語り合う交流会。 お互いの国のイメージについて話し合い、抱いているイメージと実際のイメージのギャップを知る。
●参加者人数： タイの高校生10名、日本の高校生9名、計19名
●備考：山形市外から公共交通機関を用いて来所する生徒には交通費を支給

1.分科会内容 （※内容をセクションごとに区切って記載する）

活動内容	詳細
開始・挨拶	・当分科会実施目的について全体に向けて説明 ・タイの生徒は主に自分の携帯などから参加、日本の生徒は会場に用意された４台の PC を使用
アイスブレイク（全体）	・先生と生徒の自己紹介（名前、学年） ・日本とタイ１人ずつ順番にカメラの前で簡易自己紹介をした
グループトーク１（ブレイクアウトルーム）	① ４つのグループに分かれグループトーク タイ：Ａ２人、Ｂ２人、Ｃ３人、Ｄ３人 （タイ Zoom 名「ニックネーム+学年」） （高校３年生は１グループに１人入る） 日本：Ａ３人、Ｂ２人、Ｃ２人、Ｄ２人 （西上、間宮、加藤、村岡が各グループファシリ、阿部が全体ファシリ） ② 自己紹介（名前、学年、朝ごはん何を食べたなど） ③自分のことについて話す。 （例）趣味、漫画、今一番楽しいこと、等

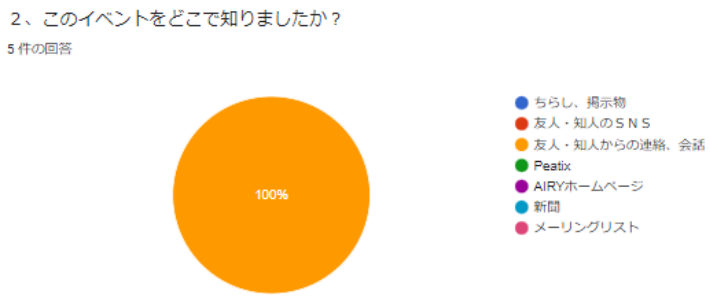
休憩	メンバーは変えずにテーブル移動する方法で、タイと日本の高校生の入れ替え
グループトーク２ （ブレイクアウトルーム）	①　自己紹介（名前、学年、好きなアニメ） ②学校生活について話す。 （例）・１日のスケジュール ・お昼ご飯はどこで何を食べる ・どうやって学校へ行く ・放課後は何をする ・宿題は多い？ ・受験勉強は大変？
感想・写真・閉会（全体）	 ・タイ生徒代表・日本生徒代表２人ずつ感想述べた。 ・全員で写真を撮影。
閉会後	・１人１枚自己紹介カードを書いて写真の撮影 カードに書いたこと ①　名前、②趣味、③メッセージ、（④インスタ ID 等） ・アンケートに答える①満足度 1-5、②理由③今後自分たちでイベントを実施してみたいかなど

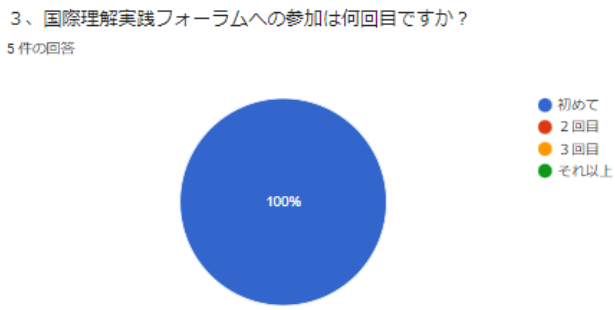
2. 使用した教材や参考資料

・オンライン交流用の機材を県庁より貸借(広角カメラ、マイクスピーカー、sim 入り PC)

・メッセージ記入用シート

3. 参加者アンケート

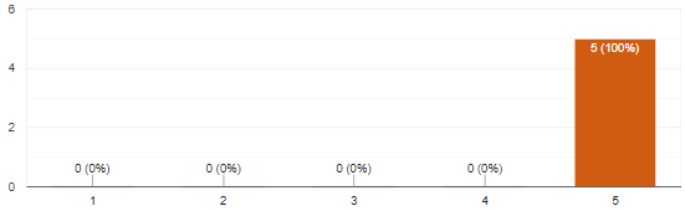




4、参加しての満足度はどのくらいですか？

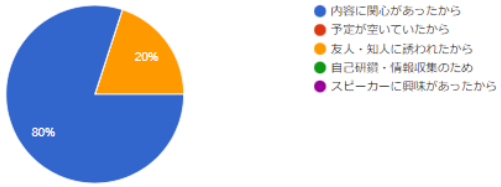
コピー

5 件の回答



6、今回イベントに参加した一番の理由は何ですか？

5 件の回答



5、質問４で選んだ回答の理由を教えてください

5 件の回答

タイの文化や、高校生の生活について知ることができ、とても勉強になったから。

同じ年代であるタイの高校生に触れる機会というのがまず初めてで、いい意味でカルチャーショックを貰うことができたからです。

私はもともと国際交流に興味を持っていたけど実際に関わる機会は今までなかったので、実際に初めて話してみることで文化や生活の違いを感じられてとても楽しかったから。

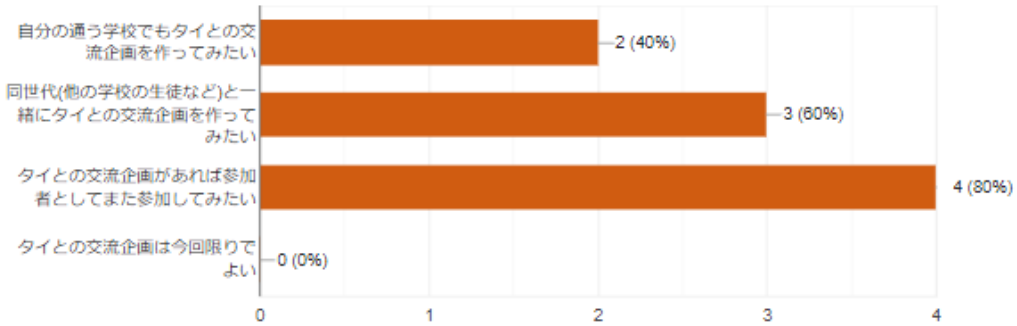
タイ、日本の高校生と楽しく交流できたから。

タイについて色々知れたし、日本語を学んでいる人に対しての言葉の選び方がわかったから。

7、タイとの交流イベントの企画について

コピー

5 件の回答



8、感想・学び・ご要望など

3 件の回答

オンラインの影響で、音声が聞こえにくかったり、コミュニケーションがうまく取れかったので、いつか機会があれば直接会って、お話ししてみたいです！

この度は本当にありがとうございました。私は仲間と国際協力について探究活動を進めていますが、タイについてももっと知りたくなったところです。
また開催して頂けるのを心待ちにしています！

今回このような形のイベントに初めて参加したのですが、優しい人ばかりですぐに緊張が解けたし、何より直接他国の人と話すことの楽しさを感じられてとても嬉しかったです。タイに目を向けることもあまりなかったので様々なことを知れて、アジアに興味を持つようになりました。またこのような機会があったら是非また参加させて頂きたいです。

4. 成果・結果について

タイと日本併せて19名、参加申込者が全員参加することができた分科会となった。
日本側は全員が一か所に集まり、タイ側はそれぞれ個人の携帯電話や PC などから参加した。
グループは4つに分けられ、グループ内の人数はタイ・日本生徒併せて5名程度まで、少人数とすることで全員が発言し意見をいいやすい環境が作られた。言語の習得レベルに差があり円滑なコミュニケーションといかない場面も多々見られたが、双方相手に伝わりやすくするためにはどうしたらいいか(やさしい日本語、写真、動き、ハンドサインなど)を試行錯誤し思いやりを持ったコミュニケーションが展開された。“言葉の通じない相手とのかかわり方”、“言葉がうまく通じない状態でも相手と関わりたい知りたいをどう体現するか”など生徒ら自身で考え工夫し、その過程で生まれる共感場面や一体感を感じる場面では安心しつつ喜びで盛り上がる場面が見られた。
最後には、集合写真のほかタイ・日本の生徒ら個々の SNS アカウント(開示するかは個人の判断)を伝えあったり、お互いに向けたメッセージボードを作成し、今回の交流の喜びと今後も継続した交流への期待を送った。

5. 担当者所感

・対面形式で少人数、かつ高校や関係者、学校の教員など参加者にダイレクトに繋がる部分へ発信した情報から参加の申し込みを受けた。この状況が、参加意欲が高くキャンセルのない参加者獲得につながったと考えられる。
・グループワークを行う際にファシリテーター人員の確保に悩んだが、関係者の方々のお力をお借りしつつ各グループにファシリテーターを配置し交流を見守ることができた。
・当日はオンライン接続の不安定さや会場でのコントロールなどで想定外の時間を要する場面もあったが、交流が始まると概ね安定し対話する場面ではたっぷりお話をすることができてよかった。
・英語を使用したコミュニケーションを想定して参加した生徒もいたが、タイの生徒間でもスキルにばらつきがあり、その点について参加者の希望に添えなかった部分がある。
・会場内での他校生間の交流の場面も見られイベント本編外のポジティブな交流も生まれた。
・実施後アンケートで、『自分の学校で自分たちでこういった交流企画をやりたい』『他校、同世代の人たちと一緒にこういった企画をやりたい』と選択式質問で回答する日本生徒がおり、自分たちで主体性をもって国際交流を行いたいと考える生徒の多さを感じた(参加者内における)。そういった回答の生徒へは今回の機会から繋がりを継続していけたらと考えている。

関係者・協力者名簿(分科会開催日順)

	名前	担当	職業・所属等
1.	小林みずほ	国際協力分科会	山形県青年海外協力協会(YOCA)
2.	渡邊直樹	国際協力分科会	山形県青年海外協力協会(YOCA)
3.	長澤恒平	国際協力分科会	山形県青年海外協力協会(YOCA)
4.	槙正智	国際協力分科会、国際理解教育分科会	山形県青年海外協力協会(YOCA)
5.	渡邊太	国際理解教育分科会	山形市立山形西小学校 教員/FKG 米沢
6.	鈴木精	国際理解教育分科会	九里学園高等学校　教頭
7.	二戸部優	国際理解教育分科会	天童市立津山小学校　教員
8.	小笠原直子	国際理解教育分科会	認定 NPO 法人 IVY
9.	山下将一	国際理解教育分科会	JICA 東北センター
10.	キム・ギョンハ	異文化理解分科会	山形県国際交流員(AIRY)
11.	ライト・シアン	異文化理解分科会	山形県国際交流員(AIRY)
12.	スピード・ジェシカ	異文化理解分科会	山形県国際交流員(県庁)
13.	髙橋希	異文化理解分科会	山形県庁国際人材活躍支援課
14.	澤恩嬉	多文化共生分科会	東北文教大学　准教授
15.	西上紀江子	多文化共生分科会、高校生分科会	認定 NPO 法人 IVY
16.	リチャード・チン	多文化共生分科会	川西町国際交流協会
17.	粟野さとみ	多文化共生分科会	(公財)山形県国際交流協会(AIRY)
18.	笹原智子	多文化共生分科会	在山形ベトナム人協会
19.	門脇エニータ	多文化共生分科会	山形インドネシア協会
20.	顧洋	多文化共生分科会	中国出身(パネリスト協力)
21.	郭琬筑	多文化共生分科会	山形市国際交流協会(パネリスト協力)
22.	アルビ バタラ ピナユンガン	多文化共生分科会	インドネシア出身(パネリスト協力)
23.	ゴー ヴァン ニー エム	多文化共生分科会	ベトナム出身(パネリスト協力)
24.	加藤翔真	高校生分科会	山形県庁国際人材活躍支援課
25.	間宮利奈	高校生分科会	東桜学館高等学校　教員
26.	ウィラワン ジャンタリマ(フォン先生)	高校生分科会	スワンナプームピッタヤパイサーン高校教員
27.	阿部眞理子	ALL(事務局)	認定 NPO 法人 IVY
28.	村岡智子	ALL(事務局)	JICA 山形デスク

●開催：１２月(２回)・２月(３回)　計５日間

●参加者人数：９３名

『国際理解実践フォーラム 2022　～山形から世界をみてみよう！～報告書』

発行年月　　2023 年 3 月
編集・発行　国際理解実践フォーラム 2022 事務局
認定 NPO 法人 IVY
独立行政法人 国際協力機構 東北支部(JICA 東北)

◆本冊子に関する質問・コメントは下記事務局までお願いいたします。
JICA 山形デスク 国際協力推進員　℡：023-646-6267
認定 NPO 法人 IVY　℡：023-634-9830